

**漢字は、コンピューターに載らないと言われ、これからの世の中には“表音文字”でなければ用をなさない、と言われるがどうか。**

そう言う学者もいます。しかし、それは、コンピューターの構造も機能も知らない人の言うことです。

コンピューターは、直接には、漢字でもカナでもローマ字でもない、ただ二つの単位素子の組合わせ(コードと呼ぶ)によって記憶が行われ、作業が行われているのです。

それを私たちの読めるものにするために、今、普通にはローマ字かかなに翻字しているのですが、それは漢字に翻字できないというものでは絶対にありません。

コードには、二つの型があります。一つは“文字ごとの組合せ”によるコードであり、他は“言葉ごとの組合せ”によるコードです。前者によれば26字のローマ字が最も少ないコードです。48字のカナがこれに次ぎ、漢字は当用漢字でも1850のコードが必要で、これは大変な違いがあります。

今、使われているコンピューターのコードは、ローマ字かかなが用

いられていますが、それは、コンピューターを必要とする実務の世界では、ごく限られた簡単な内容のものしか扱われていないので、それでこと足りるからです。

今のコンピューターの使われ方は、国鉄の予約席を決めたり、社員の俸給計算をしたり、人間の頭脳では、単純すぎる内容のものを、大量に、しかもけたはずれに速く処理する場合であって、その場合は、人間の何百倍というような能力を発揮します。

高遠な学問や思想がコンピューターで扱われるようになれば、当然、今のような、数字を主とし、ABC やイロハだけですますことはできなくなります。単純な内容、つまり現在のコンピューターのような使われ方をする限り、コードは“文字ごとの組合せ”を採ったほうが得策ですが、もっと高度な内容を扱うようになると、“言葉ごとの組合せ”を採ったほうが有利になります。

前者では、漢字はローマ字の数十倍ものコードを必要としますが、後者では、全く同じになってしまいます。つまり、前者の場合、ローマ字は26個、それに零から九までの数字を加えて計36個とすると、

$$2^5 = 32 < 36 < 64 = 2^6$$

となりますから、六つの素子の組合わせがあれば足りるわけです。

ところで、漢字は当用漢字が 1850 字、どんなに多くの漢字を使ったところで、まず四千字とは使えないはずで、そこで、かりに四千字を表わすには、どれだけの素子があればよいかと言いますと、

$$2^{11} = 2048 < 4000 < 4096 = 2^{12}$$

で、12 の素子の組合わせで十分だということがわかります。

12 は 6 のちょうど二倍です。では、漢字はローマ字の二倍複雑になるかと言いますと、決してそうはならないのです。

たとえば、sakura を文字ごとの組合わせによるコードで表わしますと、 $6 \times 6 = 36$  で、36 個の記憶素子を必要としますが、「桜」ですと、 $12 \times 1 = 12$  で、12 個の記憶素子で足りる、ということになるのです。

漢字は、文字ごとの組合わせでも言葉ごとの組合わせでも、コードの数は変わりません。したがって、コンピューターが、高度な思想を扱うようになると、文字ごとの組合わせよりも言葉の組合わせによるコードを用いることになり、ローマ字も漢字と同じ量のコードを必要とするようになることがわかります。

こうしてみますと、「コンピューターの世の中では、漢字が不要にな

る」などということは、全くばかげた意見だということがおわかりいただけたと思います。

それどころか、これからの世の中では、一目で速く読み取れて、最も短時間で思想伝達のできる漢字が、ますます必要とされるはずで、**“文字”ではなくて“言葉”を直接に表わす符号が、西欧では、驚くべき速さでふえていることが、何よりの証拠です。**